

アー जी ヴ イ カ の 業 思想 に

ついて (一)

高 橋 審 也

アー जी ヴ イ カ (Ajivika)、漢訳仏典で云う邪命外道は、仏教興起時代のインドに於いて、仏教ジャイナ教と並ぶ有力な思想であったが、他の二者と異り、今日までその宗教的生命を維持し得なかつた故に、聖典も現存しない。それ故、その思想は、仏耆両教資料によつて理解する他はない。

仏耆両教資料によれば、アー जी ヴ イ カ は無作用論、業否定論を主張したと伝えられる。パーリ資料に於ける「自作なく、他作なく、人の作なく、力なく、精進なく、人の勢力なく、人の努力もない」あるいは、「業なく、作用なく、精進なく」との主張は、ジャイナ教資料に伝える「努力もなく、業もなく、力もなく、精進もなく、人間の威力もない。一切の存在は決定されている」との主張と一致し、これをアー जी ヴ イ カ の主張と見做すことは間違いないものと思われ、仏陀が彼等の理論をあらゆる議論の中で最も劣つたものと排斥したのも、この点についてであつた。彼等によれば、すべての有情は、一定の期間に宇宙の処々に定まつた過程を経て輪廻を続けた後に解脱を得るのであり、いかなる個人的な努力によつてもそれは変更し得ないのであるとされる。そこに於いては、人間の努力の効果も否定され、善悪の因果律の否定によつて道德の成立

根拠も失わざるも得ない。アー जी ヴ イ カ の指導者 Makkhali-Gosala と並んでいわゆる六師外道の一員として伝えられる Purana Kassapa と Pakudha-Kaccāyana の道德否定説も、アー जी ヴ イ カ の決定論を根拠として成立したものであろう。

しかしながら、宗教的努力の効果も否定し、あるいは極端な道德否定論を主張する思想が、ただそれのみで多くの信徒を集めるといふことが有り得るであらうか。事実、資料に伝えるところによれば、アー जी ヴ イ カ は極めて厳格な苦行を實踐したといわれる。アー जी ヴ イ カ の苦行は、ジャイナ教のそれに影響を与えたといわれ、初期仏教資料に於いても、苦行者としては、アー जी ヴ イ カ をもつて代表せしめてゐる。彼等の苦行は、それ自体何の効力もなく、定め (niyaṃ) によつて、その様に定まつてゐるものであるとも解釈し得るが、ジャイナ教に於いて、業の流入の防止と止滅という明確な意義を有していた苦行が、アー जी ヴ イ カ に於いては全く無意味であるとは考え難い。

アー जी ヴ イ カ が業の存在を認めていたことは、仏耆両教資料によつても明らかである。パーリ資料では、五百の業と五つの業と三つの業と一つの業と半分の業とが存在すると伝えるが、注釈によれば、五つの業とは五根に依じて説かれ、三つの業とは身語意の三業である。さらに一つの業とは、身業と語業、半分の業とは意業であるとされる、このことは大毘婆沙論の説明によつても確認され、彼等が心修習 (cittābhāvanā) より身修習 (kāyābhāvanā) をより重視したといふことの理論的根拠となるであらう。大毘婆沙論によれば、身業と並んで、語業が時に重視されといわれるが、これは、ゴースラが「苦行と厭離により、よく自らを制して、人と語ることを避け」

たと伝えること、また彼等の主張たる八人地 (athapurisabhamiyo) の最高位たる智慧地 (pañña-bhūmi) を得た勝者 (jina) は、もはや何事をも語らぬとすること等によつても確認され、彼等の宗教的实践が、語身業の制御と密接に関係していたことが理解される。

アー जी विकाは、常住なる物質的存在である靈魂 (jīva) は諸々の身体と結合し、離れることを繰り返して、輪廻を続けながら、清浄となり (samsarasuddhi)、最終的な解脱を得るのであり、それはあたかも、投げられた糸まりが、糸をほどきながら走つて止まる如きであると説明する。この様な過程を人間に於いて説明するのが、六生類の説である。

六生類 (chaḥajhīā) に ついては、AN. DN. MN. 大毘婆沙論等にその内容を伝えるが、それらは概ね一致している。それによれば、人間は色によつて六種に分類される。

(一) 黒生類 (kaṭṭhīā) は、屠羊者、屠豚者、捕鳥者、捕鹿者、狩人、漁夫、盜賊、刑吏、獄吏等の残酷な職業に従する者。(二) 青生類 (nīlīā) は仏教の比丘。(三) 赤生類 (lohīā) は、一衣を着するニガントの徒。(四) 黄生類 (chāḍḍīā) とは白衣を着た在家の裸形行者 (aśaka) の弟子。(五) 白生類 (sukkīā) はアー जी विका。(六) 極白生類 (paramasukkīā) は、コーサーラとナンダ・ヴァッチャとキサ・サンキッチャの三人である。MN. によれば、「この中、すべての有情は、最初に捕鳥者等となる。それより清浄となつて仏教の沙門となる。それより清浄となつてニガントの徒となる。……」と説明され、大毘婆沙論にも「彼説黒勝生類經十四大劫往來流轉、然後得入青勝生類。(中略) 即極白勝生類復經十四大劫往來流轉、然後乃能作苦辺際。」とある如く、有

情は最下位の黒生類より、極白生類に至るまで、順次に輪廻を続けながら、靈魂を浄化し、極白生類に於いて、最終的な解脱を得るのである。かくの如き、靈魂の浄化の道程が、業の抑制の度合いと裏表の関係にあるということは明白である。即ち、黒生類の者は、その残酷なる業によつて、最も汚れていると見做されているのである。次いで、青生類なる仏教の比丘は四資具等の使用、苦行の放棄等によつて、赤生類なる一衣のみを着し、苦行を修するアー जी विकाよりも劣つたものと考えられるのである。かくして、一衣も着せず、徹底的な苦行を実施するアー जी विका、なかならず、語身業を完全に抑制し、靈魂の浄化を完成したコーサーラ等が最も上位に位するのである。

以上の如き六生類の分類が業の問題と密接に関係していることが理解されると同時に、黒生類より極白生類に至る輪廻が、それぞれの生類に於ける業の果によるものであるということも理解される。即ち、黒生類の者は、その行為の結果として青生類にしか生ずることとは出来ず、青生類の仏教の比丘は、その修行によつては、赤生類に生ずることのみが可能なのである。かくして、業を完全に抑制したコーサーラ等のみによつて解脱が得られると見做されるのである。かくの如くアー जी विकाは六生類によつて業とその結果を決して否定しているものではなく、むしろ、それによつて、有情の輪廻の過程を秩序づけたものといえる。即ち定められた輪廻の全過程を変更し得るものではないという意味では決定論であつて、個々の有情の業の因果関係を否定しているのではない。それ故、アー जी विकाを単純に努力無用論者と見ることは出来ないと思われる。

(続)(略注)